ティーチング・ポートフォリオ(教育業績ファイル)

教員氏名	林田 枝実
主な担当科目	ピアノ指導法応用Ⅰ,音楽教育メソッド実践Ⅱ,実技個人レッスン[ピアノ①,ピアノⅠ①,ピアノⅠ②,ピアノⅠ③,ピアノ実技Ⅰ①,ピアノ実技Ⅰ③,ピアノ実技Ⅰ④,音楽芸術表現実技(ピアノ)①,音楽芸術表現実技(ピアノ)②,博士特別表現研究③]
シラバス	ここをクリック(本学ポータルサイトトップページが表示されます。) ※画面下「シラバス」>「シラバスを検索するにはこちらをクリックしてください。」をクリック
2023年の教育目標・授業に臨む姿勢	2023年度はコロナが五類に移行するスタンダードでの発進となり、学生と音楽界の変容に注目すべきものがある。その一方で、守るべき音楽の本質的な伝統をどう教授していくかを常に問いながら指導にあたる。留学生も増加し、学生の多様性が表現の多様性にも通じると感じるものがしばしばある。今一度表現の根幹となる部分を学生とともに追求したい。
2023年の教育に関する自己評価	2023年度は徐々にコロナ前同様の授業展開となり、新入生も高校生時代にコロナを潜り抜けている世代となり、学園全体は活気を取り戻しているかのように見受けられた。しかし、コロナ前からの音楽の発信・受容方法の変化は継続しており、個々の考え・スタイルに照準を合わせた指導が肝要。また、コロナ禍も相まって音楽の発信方法のみならず自己表現のあり方も変化し、学生のメンタリティのみならず、その保護者にも及ぶ包括的な指導を求められる現場が非常に多く、学修サポートが激増した年度でもあった。そのような中で、やはり学生も教員もともに一つのゴールを目指すとして、それが音楽表現そのものであることを実証できた年度であったと感じている。またそのための人間形成、人間関係、学修姿勢を教育のモットーとした。
2023年のFD活動に関する自己評価	2023年度のFD年間テーマ ①「多様な背景を持つ学生が持続的かつ安心して学べる学修環境とは」 ②「コロナ禍を経た教育方法・教育効果の検証」 ③「新しい時代の大学人に求められることとは」に沿った全体会、各プレゼンテーションの内容が大変時代を先取りした内容で、今後の音大の立ち位置を示され、検証する機会を提供されたと認識している。グループディスカッションでは特に留学生問題について考察する機会となった。 また所属部会主任指導のもと、学内組織としても多角的に取り組んだ。特に、非常勤講師との情報共有と指導内容の検証は喫緊の課題であり、これらをFDテーマと照合し、対応にあたっている。
授業改善のために取り入れた研修内容	コロナ禍を経て、学生のメンタリティ、特に留学生については、国際関係の微妙な変化に伴う注視が必要であった。「表現者」を育てることと、「主体性のある一人」を育成することは昨年度からの継続テーマとして意識して取り組んだ。一方で、AI化等の時代の歩みは担当授業の運用等には及ばないものの、まさに20世紀初頭の音楽の近代革命の激動期と重複していることを学生と共有した。常に変わり続ける(前進する)ことが音楽そのものと、③から学生像を見ている。

2023 年度(前期)「学生による授業アンケート」結果に対する授業改善計画書

教員コード:0570 教員名:林田 枝実

1)アンケート結果に対する所見

前期半期科目の中から、主担当の「ピアノ指導法応用Ⅰ」と、2名担当の「音楽教育メソッドⅠ」の評価について所見させて頂く。

ともに、ピアノ指導者コースの必修科目であり、実践を伴う授業展開となっている。特に「ピアノ指導法応用Ⅰ」は、履修者がピアノ指導者コースの学生のみという少人数のクラスであり、学生にとって、毎週の課題も少なくない。1、2年次に履修した「ピアノ指導法応用Ⅰ、Ⅱ」に続くクラスとなるが、1限という時間帯で、指導者になることへの期待だけでなく、現実感、緊張感を実感する機会になっていると思われる。3年次は、大学生活のターニングポイントでもあるので、キャリア形成の一環としても、1限の授業に出席することがノーマルになるように次年度も背中を押していきたい。

「音楽教育メソッドⅠ」は、オムニバス形式で、必修に設定されているピアノ指導者コース以外にも履修者が含まれている。前期は、全授業でメソッドの実践を課しているのに、身体を動かすことに積極的でない学生も見受けられたことが、この結果に繋がっていると推察する。

2)要望への対応・改善方策

「音楽教育メソッドⅠ」については、授業内容を学生に明確に伝える機会を設け、個々に無理のない履修計画が可能であるよう、担当教員で相談していきたい。

3)今後の課題

今回は、ピアノ指導者コースの必修科目について検証したが、「ピアノ指導者コース」自体のあり方についても、鍵盤楽器部会では常々検討している。

今日では、あらゆる情報に溢れ、指導を受けることをスルーしてピアノを手練り寄せるケースも多い。しかしながら、素晴らしい指導者との出会いこそが、ピアニスト、音楽愛好家を増やしていくことになることは間違いがない。そのために、より有益で魅力的なカリキュラムと授業展開は必須である。

このため「ピアノ指導法応用」については、「ピアノ指導法基礎」担当教員とも情報共有を緊密に行なっているが、さらに、学生層の変容や現状に沿った内容を検討していきたい。また、「音楽教育メソッド」は、これまで以上に新旧のメソッドを追究し、授業展開に活かしていきたい。

以上

2023 年度(後期)「学生による授業アンケート」結果に対する授業改善計画書

教員コード:0570 教員名:林田 枝実

1)アンケート結果に対する所見

2023 年度後期の結果については、概ね了解している。その中で、「音楽教育メソッド実践Ⅱ」について、多少結果にばらつきが散見されるのは、オムニバス形式の授業内容であったことが要因と思われる。担当頂いた教員によっては、集中補講期間に授業を実施して頂いたケースがあった。これはシラバスにも記載済みであったが、学生の捉え方に違いがあったと思われる。

また、ピアノ実技に関しては、22 名中 4 名のみの回答にとどまったことは非常に驚くべき結果であった。これまで何年もこのアンケート結果を頂いているが、このような回答率は記憶に無い。まず結果を得られないと、本アンケートの実施意義は皆無であろう。この要因について、当該年度に特段思い当たることは無いが、これまで意識してこなかった本アンケートについての意思疎通を学生と図り直す必要があるのではなかろうか。

2)要望への対応・改善方策

前述のように、いかにしてアンケート回答率を改善できるかということについて。24 年度は担当している学生達に周知徹底を試みて、アンケートを実施することについて意見交換をする等、新たなコミュニケーションを図っていきたいと考えている。学内では多くのアンケート調査が実施されていることもあり、学生達への負荷も少なくない。ある程度の余裕がないと学生の主体性には結びつかないと思われる。アンケートは強制するものではないので、学生の自然な取り組み、尚且つ大学への興味や愛情があってこそ、行動に移るものと思われる。大学の姿勢、方針を授業やレッスンの中で共有していくことも視野に入れたい。

3)今後の課題

学生の音楽との接点も変容し続けているが、その中で、改めて大学生として学ぶことの意義、学年を重ねることで得るものの大きさをどう伝えていけるのか、アンケートの結果を読み解きながら、教員として考えさせられることが少なくない。スピードをもって結果を望むデジタル化と反比例して、学生の純粋な心が一層際立ってくるのは、やはり生の音を通してコミュニケーションしているからではないか。

どのように、大学生活の満足度を保っていくか。本学を選んだ学生に、どれだけのことを提供できているのであろうか。

当たり前のことであるが、常に変化する学生の目線を識ること。一方通行でない言葉での会話、そして、音での会話からと感じている。

以 上